

創世記4章「最初の宗教、最初の殺人」

4:1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。4:6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。4:7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。4:9 【主】はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないでしょうか。」4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。4:11 今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。4:12 それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」4:13 カインは【主】に申し上げた。「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。4:14 ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので、私はあなたの御顔から隠れ、地上をさまよい歩くさすらい人とならなければなりません。それで、私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう。」4:15 【主】は彼に仰せられた。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。」そこで【主】は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった。4:16 それで、カインは、【主】の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。4:17 カインはその妻を知った。彼女はみごもり、エノクを産んだ。カインは町を建てていたので、自分の子の名にちなんで、その町にエノクという名をつけた。4:18 エノクにはイラデが生まれた。イラデにはメフヤエルが生まれ、メフヤエルにはメトシャエルが生まれ、メトシャエルにはレメクが生まれた。4:19 レメクはふたりの妻をめぐらした。ひとりの名はアダ、他のひとりの名はツィラであった。4:20 アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。4:21 その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。4:22 ツィラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった。トバル・カインの妹は、ナアマであった。4:23 さて、レメクはその妻たちに言った。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。4:24 カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」4:25 アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」4:26 セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は【主】の御名によって祈ることを始めた。

導入

創世記3：7と3：21を読みましょう。

創世記3:7 このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。

創世記3:21 神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。

アダムとエバは自分たちの裸と恥を覆い隠そうとしましたが、神はそれを許されませんでした。いちじくの葉は裸を隠しましたが、彼らの心の中は罪でいっぱいでした。神は、罪の問題を取り除くためにアダムとエバが自分でできることは何もないということをふたりに教えようとなさいました。

神に受け入れられる覆いを提供できるのは、神ご自身だけです。こうして神は、動物を殺し、アダムとエバに衣服を与えられました。

罪が死をもたらすという事実が目の当たりに突き付けられました。アダムとエバは死というものを見たことはありませんでした。動物が殺されるのを見るのは、ふたりにとって恐ろしい体験だったでしょう。神とアダムとエバの間にどのような会話が交わされたかはわかりませんが、自分たちの衣服を用意するために動物が死ななければならないということをふたりははっきりと認識したでしょう。

エデンの園での生活から、墮落した世界での生活が始まります。すべてが美しくて良いという世界はもう存在しません。すべてが罪で汚されている世界です。アダムとエバはエデンの園から追放されました。蛇にそそのかされて神のこぼに逆らったからです。

アダムとエバには、罪の性質が備わりました。この罪の性質は、それ以降生まれるすべての子孫に受け継がれます。（ローマ5：12）

神は、園の入口に炎の剣を置かれました。アダムとエバが園に再び入ることのないためです。

今日学ぶ4章には、おもにふたつの出来事が描かれています。まず、人が初めて「宗教」を試みたこと、次に「最初の殺人」です。

1. 人が初めて宗教を試みる。(3-7節)

1-2節には、アダムとエバにふたりの子が生まれたとあります。カインとアベルでした。アベルは羊を飼う者、カインは土を耕す者でした。

カインは地の作物から神に捧げ物を持ってきました。一方、アベルは羊の初子の中から最上のものを持ってきました。

この出来事は「ある時期になって」起こったと聖書は語ります。この個所のヘブル語の意味は、「日が極まって」です。

フルクテンバウムというユダヤ人学者は、このヘブル語が意味するのは、「定められた具体的な日」だと語ります。

そして、捧げ物を捧げる決まった日があったとも言います。つまり、捧げ物を捧げる日を神があらかじめ定められたということです。

もしそうであったなら、カインとアベルが主に捧げ物をささげるのは、この時が初めてではなかったでしょう。また、人の罪の贖いのために「血のいけにえ」をするよう神が命じられたでしょう。

この個所は、神がアベルの捧げ物には目を留められたが、カインの捧げ物には目を留められなかったと語ります。

なぜでしょう。

ヘブル11：4を見てみましょう。

ヘブル 11:4 信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによって彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良

いささげ物だとあかししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって、今もなお語っています。

アベルは信仰をもって神に捧げ物をささげましたが、カインは違ったということです。では、何に対する信仰でしょう。

答えは簡単です。動物のいけにえを捧げるよう命じられた神のことばを信じる信仰です。

旧約聖書で神が命じられた動物のいけにえに関する内容から、罪の赦しに対して神が定められた方法をアベルが信じていたことがわかります。

ヘブル9：22は、「…血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」と語ります。

レビ記17：11には、「なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。」とあります。

血のいけにえという概念にはふたつの側面があります。

「身代わり」と「贖い」です。

通常、人は自らの罪のせいで死にます。しかし、未来のある出来事に基づいて、人の身代わりとして罪のない動物の死を受けて入れてくださると神がおっしゃいました。命と引き換えの命です。罪のないものが罪のある者のために死ぬのです。

いけにえは、罪と死の法則に従いつつ義が満たされていることを描きます。

血のいけにえのもうひとつの側面は、「贖い」です。神は、血が罪の贖いをするとおっしゃいました。贖いとは覆うことを意味します。

血が流されることで人の罪は覆われます。こうして、神が人をご覧になっても、そこに罪は見られなくなるのです。

人は正しいと見なされ、神に受け入れられます。すると、神と人との関係が回復されます。人は肉体の死を通らなければなりません、永遠の罰は免れます。永遠の罰とは、火の池に投げ込まれ、永遠に神から引き離されることです。

身代わりの死と祭壇の贖いの血が示すように、人は神を信じる信仰をとおして、罪の赦しを得、神との新しいつながりを見出します。

なぜ神がカインの捧げ物に目を留められなかったのかという問いに戻りましょう。カインにはふたつの誤りがありました。

1. 彼の行いから、カインが神を心から信頼していなかったことがわかる。
2. カインは、自分なりのやりかたをして失敗した。

人間的な方法で神と和解をしようとしても、神は受け入れてくださいません。

カインの心掛けは良かったのですが、彼の気持ちだけでは、人と神との隔たりを埋めるのに十分ではありませんでした。カインは自分のやりかたで事を行いました。何が正しいのか、神よりもわかっているつもりになってしまいました。

一方、アベルは神が命じられたとおりの捧げ物を捧げました。

つまり、罪のない動物が彼の身代わりに死んで血を流したのです。アベルは、彼自身の罪のために死ぬべき人でしたが、神は彼をあわれみ、動物がアベルの身代わりとなって死ぬことをよしとしてくださいました。

アベルは、主の御前にいけにえを置きました。これは、神がご自身の約束を守ってくださるお方であることを信じる信仰の表明です。神の約束とは、恐ろしい罪の罰から彼を救ってくれる救い主が遣わされるという約束です。

救い主がどのような方法でその役割を果たされるかをアベルは知らなかったでしょう。けれども、神が解決をもたらしてくださるとアベルが信頼していたことが、ヘブル11：4からわかります。

カインは、宗教を始めた最初の人です。宗教とは、常に、神との和解に対する人間の試みです。

けれども、神と和解する方法はただひとつです。それは、神のやり方です。

こういうわけで、ユダの手紙には、神の方法に背いた人々の例としてカインが挙げられているのです。

新約聖書を読むと、神は動物のいけにえを終わらせ、代わりに、罪の赦しを与えるためにたった一度ささげられるいけにえとしてご自身の御子を遣わしてくださったことがわかります。

イエス・キリストは、私たちの身代わりに死なれました。それは、罪に対する神の御怒りから私たちが解放されるためです。

イエスをとおさず、他のどんな方法で神に近づこうとしても、神はそれをお許しにはなりません。受け入れていただけません。

イエスはヨハネ14：6で、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とおっしゃいました。

罪の赦しを与えてくれる信仰は他にありません。

他の方法を試しても、カインがそうだったように、退けられてしまいます。

7節で、神はカインに悔い改めのチャンスをお与えになります。それでもカインは、神のやり方が気に入らなかったようです。

人が神に反抗しはじめるとどうなるでしょう。たいていの場合、神と歩んでいる人を傷つけようとしています。そういう人たちの生き方を見て後ろめたさを感じるからです。

では、この章のふたつめのテーマであるアベルの殺人に話を進めましょう。

2. 最初の殺人 (8節)

神に受け入れてもらえなかったカインは、弟アベルを殺そうと決めました。

9節で、神はカインに語りかけられます。「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」

するとカインは「私は、自分の弟の番人なのではないですか。」と答えました。つまり、「私はいつも弟の居場所を知っていなければならないのですか」ということです。

カインはこのように、弟殺しの罪を認めず、神に口答えしました。

この時カインが罪を告白していたなら、赦していただくチャンスがあったでしょう。けれども、カインはそうしませんでした。

10節で、カインがアベルを殺したことを神はすべてお見通しだとおっしゃいます。

そこには、「あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。」とあります。

イエス・キリストを信じる信仰をとおして、神は私たちに赦しを得させてくださいます。この神のやり方を信じる信徒にとって、これはとても励みになります。

イエス・キリストを信じる信徒にとって、死がすべての終わりではないと教えてくれるからです。

詩篇116：15にはこうあります。「主の聖徒たちの死は【主】の目に尊い。」

アベルは神にとって尊い存在でした。そしていつか彼は死からよみがえります。

神は、アベルの死後もご自身がアベルの神であられることを証明されました。

11-15節には、カインに対する罰の内容が記されています。

カインはその罰の厳しさを4つのかたちで知ることになります。

1. カインは、地を耕すという職業を失ったことを知った。(14節)
2. カインは、神との絆を失うことを知った。(14節)
3. カインには、帰るべき家がない。(14節)
4. カインは、常に身の危険を感じることになる。(14節)

神はカインにあわれみを示してくださいました。5節は、カインが殺されないように、神がカインにしるしをつけられたと語ります。

殺人に対する死刑を神が導入されたのは、創世記9：6からです。

創9:6 人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

神の目に、殺人は常に過ちであることを私たちは覚えておかなければなりません。

そのおもな理由はこの個所に記されているとおりです。誰かが殺されると、唯一無二のものが破壊されるのです。二度とない人生が奪われるのです。

人を破壊することは、神がご自身に似せて造られた作品を破壊することです。これは、創造主を軽んじる行為です。

個人所有のギャラリーに入って、そこにある作品をすべて壊したなら、心ない破壊行為であるだけでなく、アーティストが造り上げた何かを破壊することになります。それはアーティストに対する侮辱行為です。人を破壊するのは、神のかたちを壊すことです。

16-24節には、カインの家族についての詳細が記されています。

カインの子孫も神に背き続けたようです。

23-24節で、カインの子孫のひとり、けがをさせられて仕返しにその人を殺したことを誇らしげに語ります。これは、初めて登場するヘブル語の詩歌です。

この4章の最後には、ふたつの良い知らせがあります。

1. アダムとエバはもうひとり息子を授かり、セツと名付けました。セツはカインが殺したアベルの代わりであると記されています。5：3には、セツが生まれたときアダムが130歳だったとあります。その系図をたどると、ルカ3章で、セツの家系からイエスがお生まれになったことがわかります。セツはヨセフの先祖にあたるわけです。
2. もうひとつの良い知らせは、26節の最後に登場します。そこには、「人々は【主】の御名によって祈ることを始めた。」とあります。

なぜそれが良い知らせなのでしょう。原語のヘブル語を見ると、神の御名を呼び、告げ知らせていたことがわかります。

同じヘブル語の単語が創世記12：8にも使われています。それは、アブラハムが主のために祭壇を築いて、主の御名によって祈った個所です。創世記13：4にも登場します。

これが公の場で行われる礼拝の始まりでした。そこでは祈りや賛美、感謝がささげられていたことでしょう。

適用

今日学んだ個所から、私たちの日常に活かせることは何でしょう。

まず、「宗教」は人の心を変えないということです。宗教は、救いに関して神が既に示された方法を無視することです。神社仏閣で拝んだりお賽銭をしたりしても、心は変わりません。また、聖書が教える偉大な創造主なる神との立場も変わりません。どんな宗教であっても、宗教を支持するのは人間的なやり方を進めているだけです。神を退け、他のもので代用しようとする人間のやり方です。神に受け入れてもらおうとする人間的なやり方は、神には決して受け入れられません。

人間的なやり方は常に死に通じます。その死とは、体とたましいの両方の死です。一方、神のやりかたは常にいのちに通じます。それはいつの日か与えられるよみがえりの体と、今いただけるたましいのいのちです。

私たちは、神との平和を心に今得ることができます。そのためには、神の方法で罪の対処をしていただき、神のもとへ来る必要があります。

ヨハネ14：6でイエスはおっしゃいました。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

ですから、罪を赦していただく唯一の方法は、イエスに信仰を置くことです。神は、罪の問題を解決するために、大きな犠牲を払ってイエスをこの世に遣わしてくださいました。このお方の犠牲によって、私たちに赦しを与えられます。イエスは私たちの代わりに死んでくださいました。私たちの身代わりとなられたのです。

ただ神の恵みによって、私たちは神の目に義とされます。

私たちが何かをする必要はありません。ただ、認めて悔い改め、赦しを受け取ればよいのです。

あなたは今日、そうしようと思いませんか。